# 愛知教育大学国語・書道専攻「初年次演習」の実践報告 2014

## ― 読書指導と対話を重視して ―

牧　恵子

# First-Year Experience 2014 to Aichi University of Education Japanese Language Specialty

## ― through Reading and Dialogue ―

Keiko MAKI

要約

本研究は，初年次学生を対象として開発・蓄積してきた「ワークシートに記入しながら 2 冊の本を読む」指導を手がかりに，学生が主体的に学びの姿勢を形成していく授業方法を解明することが目的である。

本稿では，2014 年度前期，愛知教育大学初等教育教員養成課程の国語選修および中等教育教員養成課程の国語・書道専攻（以下では両方含めて国語・書道専攻と記す）1 年生対象「初年次演習」科目の授業実践を 2 点に構成して報告する。第一に，今回の授業開講前の愛知教育大学学生・教員向けアンケート調査結果と全国大学初年次教育調査結果を示す。第二に，2014 年度前期「初年次演習」について、授業展開の方法とそこで提出された学生のアンケート結果の提示である。

本実践後，受講生が目標に対して積極的に取り組み，読書への認識を変え，クラスメンバーとの協働も増えた。さらに，他の授業科目や大学内外のさまざまな場面でも「複眼的思考」と「交流」という二つの手法を活用した具体的事例を報告する。

キーワード：大学生への読書指導　　比較読み　　責任ある対話

## 1 本実践の背景

21 世紀になり，SNS の広がりなど社会の変化とともに，コミュニケーションツールである「人と直接，対話する」といった基礎的行動に戸惑いを覚える学生の傾向もみられる。こうした日本の若者の状況を踏まえ，「初年次教育」の研究ならびに実践は，「大学教育学会」「初年次教育学会」「日本リメディアル教育学会」で課題となっている。

さて，筆者は，愛知教育大学（以下，本学）で全学向けの初年次科目実践や読書支援を意識した実践の報告[1,2]を行い，その後，学生が主体的に学ぶ姿勢を持つような初年次教育のあり方を模索し続けている。

2013 年度国語・書道専攻では専任教員によるオムニバス方式の「初年次演習」が展開された。2014 年度新たに初年次教育を見直すことを要請され，筆者と他 1 名[3]の国語・書道専攻非常勤講師が協働して，クラス受講生 40 名程度を担当し開講にいたった。授業担当者は，テキスト[4]と 2 冊のワークノート[5,6]を，学生への共通課題とした。両講師は毎授業時間前後に数時間の FD を行い，授業を徐々に形成するという形で進めた。協働した非常勤講師は初めての授業方法であったが，この方法を概ね理解したうえで，授業を実施した。2 クラス合同授業の開講，図書館活動の合同支援，授業プリントの共有も行った。

さて，初年次教育学会で整理されているように，初年次教育の具体的な内容[7]は，かつての「アカデミック・スキルの獲得」に重点が置かれていた時代から，昨今では「協働学習」「サービス・ラーニング」等が多くの大学で取り入れられてきている。また，キャリア教育や学生支援の内容も初年次教育の正課授業内に位置づけられ，広範な学生支援が行われてきている。

## 2 事前調査と「初年次教育」の整理

### 2.1 開講前アンケート調査

2014 年度授業開始前の 2013 年度末（2014 年 1 月～3 月）に，国語・書道専攻の在学生（1 年生～4 年生）と教員にアンケート調査を依頼した。各学年が終了しつつある時期での回答は，1 年生 28（36%），2 年生 68（85%），3 年生 25（31%），4 年生 52（58%），合計 173（53%）であった。

#### 2.1.1 在学生の期待する「初年次演習」

本学で 2013 年度から「初年次演習」が開講された事情から，本アンケートのなかでも調査対象の 1 年生

は「初年次演習」科目を履修し，2 年生以上は「初年次演習」科目の履修経験がない。アンケート調査では，「初年次教育」という用語を簡単に説明したうえで，以下のような「問」を設定し調査した。

**表 1 アンケート「初年次演習」の学習希望**

問.
他大学でも一般的に行われている「初年次教育」内容の 6 領域があります。あなたが，大学に入学した頃を思い出して，今にして思うとこのような「初年次教育」の授業で大学での学びを知るとよかったと感じる順番に，「1」「2」「3」と上位 3 番まで順番を振ってください。一般的に，大学の初年次教育では、「書くこと」に重点を置いていることが多いです。しかし、6 項目以外に，「話す・聴く」、「調べる」など，他の領域もあります。6 項目以外にある人は，表の一番下の「その他」に記入してください。

| テーマ | 授業内容 | 順番 |
|---|---|---|
| A.語句や文 | 間違った文やわかりにくい表現を直す練習。書き言葉の表現練習。 | |
| B.文章を書く | 意見文や小論文、自分史、報告文等を書く。 | |
| C.実用文を書く | マニュアル、依頼文、礼状、他者へのアピール文などを書く。 | |
| D.読書とレポート | 図書・新聞記事・データや資料をもとに、一般的なテーマでレポートを書く。 | |
| E. 専門分野（国語書道）の学習基礎 | 講義の要約文、専門分野(国語科)の論文検索・読解と要約。専門分野の論文を読んで、レジュメ作成、クラス発表。書評。 | |
| F.総合的発表 | スピーチやポスター制作。テーマ研究と発表、報告書。 | |
| G.その他 | | |

調査（N=173）の結果，在学生の学習希望は，第 1 位「E.専門分野の学習基礎」，第 2 位「B. 文章を書く」，第 3 位「D. 読書とレポート」となり，「F. 総合的発表」が最下位であった。

### 2.1.2 後輩に薦めたい図書

「教育学」に関連する読書について，在学生に**表 2** のように尋ね，**図 1** の結果が得られた。

**図 1** は，**表 2** の質問に回答のあった冊数を，人数に換算して一覧した。今までの大学生活を通して読んできた本のなかから，後輩にも薦めたい教育学に関連する図書の無記入が 62～23%と，その多さが目立った。また，ある授業で使用した笠原紀久恵（1981）『友がいてぼくがある』は，4 年生からの回収アンケートの 44%に記載されており，授業で紹介された図書からの影響は大きいことが明らかになった。**表 3** には，学生が推薦した図書の一例を記しておく。

**表 2 アンケート「後輩に薦めたい図書」**

問.
あなたが入学後に読んだ本の中から、後輩の 1 年生にも薦めたい教育学部に関連する基本図書（小説・物語・詩集以外）を 3 冊以上、記入してください。本の入手方法（授業で教科書となった，授業で紹介された，自由検索など）に○をつけ、その推薦理由も書いてください。

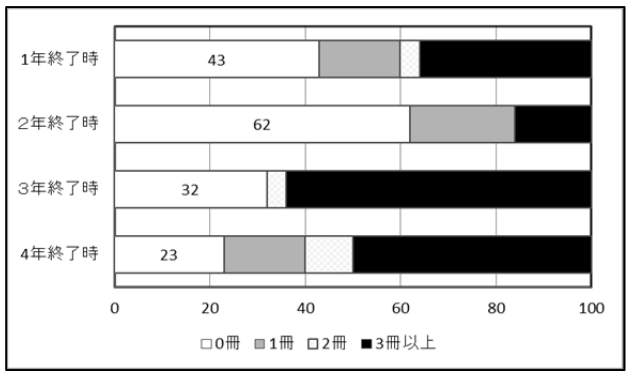


**図 1 後輩に薦めたい図書の冊数（N=173）**

**表 3 後輩に薦めたい図書の例**

本田由紀（2011）『学校の「空気」（若者の気分）』/ 内田樹（2005）『先生はえらい』/ 志水宏吉編 （2011）『格差をこえる学校づくり』/ 野口 敏（2008）『一瞬で心をつかむ話し方』/ 尾木直樹（2000）『子どもの危機をどう見るか』/ 河合隼雄・鷲田清一（2010）『臨床とことば』/ 斎藤孝（2002）『読書力』

一方，国語・書道専攻の教員対象アンケートの結果では，**表 4** の例のように，専門領域への入門段階の図書が提案される傾向にあった。

**表 4 教員からの推薦図書の例**

酒井聡樹（2007）『これからレポート・卒論を書く若者のために』/ 田中共子（2009）『図書館で出会える 100 冊』岩波ジュニア新書 / 金田一春彦（1988）『日本語上・下』岩波新書 / 中村紀久二（1992）『教科書の社会史』岩波新書 / 石原千秋ほか（1991）『読むための理論』/ 有働裕（2010）『これからの古典文学のために』/ 阿辻哲次（1989 普及版）『図説 漢字の歴史』

教育全般に関する読書をする学生と専門領域の導入を重視する教員の両面が明らかになった。半期授業という少ない時間内で，どのようにその両者のバランスをとっていくかが課題である。

### 2.2 「全国大学初年次教育調査」（2009）

「初年次教育」の重要性が指摘されるようになったことを受けて，2009 年「全国大学初年次教育調査」[8,9] から 8 点の目的が整理された。それらを参考に，本学に喫緊必要な 5 点の目的を**表 5** に整理した。

さらに，教員養成系大学の初年次教育では，「学生が大学生として学ぶこと」という本来の意義があること

に加えて,「学んだことを次の世代に伝えていく」という二重の教育の役割があることが重要な点である。この両者の役割を担う「初年次演習」は貴重な学びのスタートとなると考えている。

**表 5 本学に必要な初年次教育項目**

| |
|---|
| ① 高校までの受動的な学習から、能動的で自立的・自律的な学習態度への転換を図る |
| ② 学生生活や学習習慣などの自己管理・時間管理能力をつくる |
| ③ 大学の中に人間関係を構築する |
| ④ レポートの書き方、文献検索方法など、大学で学ぶためのスタディ・スキルズやアカデミック・スキルを獲得する |
| ⑤ クリティカルシンキングやコミュニケーション力など大学で学ぶための方法を身につける |

## 3 授業実践の報告

### 3.1 シラバス

**表 6** の授業展開に示すように，授業は「若者・大学生」「健康」「文化」「働く」の 4 つのテーマからレポート作成の習得を中心としたものである。次に示す 6 ステップを基盤に「レポート作成の型」を作った。①「選書」⇒②「交流」⇒③「読書とノート」⇒④「アウトラインの交流」⇒⑤「練習レポート」⇒⑥「交流」という流れであり，練習レポートはすべてノートに手書きさせ，反復した。

さらに,「初年次演習」が大学での「学びの方法」の獲得という目的を持つ以上，NIE（Newspaper in Education）は欠かせない。ただし，新聞学習を課したことで，授業外学習が増えることになった。

**表 6 シラバス**

| 回 | 授業 | 授業外学習 |
|---|---|---|
| 1 | ガイダンス | |
| 2 | 新聞学習(1) | |
| 3 | 新聞学習(2)<br>「**大学生・若者**」読書方法 | 選書１冊<br>ノートメモ |
| 4 | 新聞学習(3)<br>「大学生・若者」交流<br>練習レポート | 練習レポート/「健康」選書/図書館ガイダンス |
| 5 | 「**健康**」交流　練習レポート | 練習レポート |
| 6 | 「健康」レポートの交流<br>１冊と２冊の比較①アンケート | 「文化」選書２冊 |
| 7 | 新聞学習(4)<br>「**文化**」交流・表現ルール | 「文化」ノート・練習レポート |
| 8 | 新聞学習(5)<br>１冊と２冊の比較② | |
| 9 | 「文化」交流 | |
| 10 | 今までのノート整理 | 「働く」選書 2 冊ノート |
| 11 | 「**働く**」交流<br>「まなびネット」へ投稿準備 | 「働く」練習レポート |
| 12 | 「働く」練習レポートの交流 | 最終レポート構想 |
| 13 | 最終レポート（構想の交流）<br>図書館ワークシートの提出 | |
| 14 | ２クラス合同交流<br>―読書とレポートの関係― | 最終レポート |
| 15 | 振り返り | 最終レポート推敲 |

最終レポートに関しては，4 点の下書きの練習レポートから１点を選ばせ，文章表現に留意させながらパソコン入力したうえで，学内「まなびネット」の「授業ポスト」に投函させた。最終レポートで「働く」テーマを選んだ学生が全体の 55%と最多であり，様々な職業から「教師」として働くことを相対化しようとするレポート内容が印象的であった。次の**表 7** に，2 冊の本で「働く」を取り上げた５名の図書を例示する。

**表 7 「働く」テーマでの 2 冊選書例**

| | | |
|---|---|---|
| 学生A | ティム・クラーク＆カール・ケイ(2006)『日本人が知らない「儲かる国」ニッポン』 | 長山靖生(2003)『若者はなぜ「決められない」か』 |
| B | 稲泉連(2001)『僕らが働く理由、働かない理由、働けない理由』 | 松本健嗣（2009）『「未熟もの」としての教師』 農文協 |
| C | 齋藤孝（2005）『働く気持ちに火をつける』 | 高橋俊介（2006）『人が育つ会社をつくる』 |
| D | 大脇雅子、中島通子、中野麻美有斐閣選書（1996）『21 世紀の男女の平等法』 | 民事法研究会（2003）『Q&A 女性と労働 110 番』 |
| E | 塩野誠（2013）『20 代のための「キャリア」と「仕事」入門』 | 渡辺三枝子（2003）『キャリアの心理学ー働く人の理解ー』 |

### 3.2 大学生への「読書方法」の提案

**―「実読[10]」「あらまし読み[11]」「比較読み[12]」―**

高校までに明確に習得してこなかった３つの読書方法を獲得することを「初年次演習」の基礎と設定した。これが,「実読」「あらまし読み」「比較読み」である。

塚田泰彦（2014）[13] の指摘からも明らかなように，現在の日本の初等・中等教育「国語」の授業では「読解指導」が中心であり「読書指導」には至っていない。

そこで，第一に，小説や物語などのフィクションの「楽読」とは異なる，ノンフィクションの「実読」に方向を向けた。「楽読」や「実読」という用語は，樋口裕一の用語を援用し，大学生に向けて，専門書につながるノンフィクションの本を読む必要性を説いた。具体的には「新書」から始めることを勧めた。

第二に，本を大まかに捉える読み方の必要性を伝えた。4 年生になっても，本をはじめから最後まで丁寧に読もうとして行き詰まり，結局何も本から読み取れずに終わっている実態が見られた。そこで、「初年次演習」ではざっと内容をつかむような読み方を「あらまし読み」と筆者が仮称し，その方法を指導した。

第三に，「2 冊比較読み」という方法を使って複眼的思考する方法を身につけることを支援した。読書不足の学生が 1 冊だけ読む場合，書かれた内容を一方的に了解してしまい，感想文のようなレポートしか書けない事態に陥る。そこで，2 冊を選ぶ難しさを乗り越えさせることで，自分の課題を明確にさせた。これは，図書を使った課題発見の一手法である。自分で設定した課題であるから課題に対して積極的に関わろうとする。次に，2 冊の著者の立場や述べ方を比較することで，課題に対して客観的比較を行おうとしている。

このように，高校生までに読んでこなかった読書分野を対象に，新たな取り組みとして関わらせていった。

さて，「読書方法」に関しては初等教育からも指導目標が設定されてきている。2010 年度施行文科省「学習指導要領」小学校国語第 5 学年・第 6 学年「読むこと」には，「イ　目的に応じて，本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること。」「カ　目的に応じて，複数の本や文章などを選んで比べて読むこと。」という目標がある。これらは，教員養成系大学の学生自身の学びであると同時に，児童・生徒に教えていく立場から身につけておきたい学習目標であることは当然である。「ヒト・テクストとの対話ノート」（**表 8**）には，こうした新しい読書方法を記録させた。受講生は，テーマごとに「あらまし読み」と「比較読み」を記録することで思考を深める練習を行い，自習のスタイルを獲得していくこととした。

**表 8 「ヒト・テクストとの対話ノート」**

（1 セット A4 判×8 ページ，5 セット分で 1 冊）

| | |
|---|---|
| 第〇回　1/2 あらまし読み<br>1. 手に取った理由や印象<br>2. 書誌<br>3. 関心の高い章題<br>4. キーワード 12 選出<br>5. 序章の要約（文章化）<br>-1- | 6. 関心ある章（20-30 ページ分）のマッピング<br>7. 専門用語・時事用語調査<br>8. 内容に関連した日常知からの Q&A を作る<br>-2- |
| 第〇回　2/2 あらまし読み<br>1. 手に取った理由や印象<br>2. 書誌<br>3. 関心の高い章題<br>4. キーワード 12 選出<br>5. 序章の要約（文章化） | 6. 関心ある章（20-30 ページ分）のマッピング<br>7. 専門用語・時事用語調査<br>8. 内容に関連した日常知からの Q&A を作る |
| -3- | -4- |
| 2 冊の本をもとにした<br>アウトライン・メモ<br>1.　共通点<br>2.　相違点<br>3.　考察<br>4.　**メンバーコメント欄**<br>-5- | レポートの構成<br>（＝レジュメ）<br>1. はじめに<br>2. 概要<br>3. 考察<br>［引用文献］<br>-6- |
| 練習レポートの手書き<br>題名　　氏名<br>1. はじめに<br>2. テーマの概観<br>(1)『　　』の概要<br>(2)『　　』の概要<br>-7- | 3. 考察<br>共通点・相違点<br>明らかになったこと 3 点<br>今後の課題<br>［引用文献］<br>**メンバーコメント欄 2 名分**<br>-8- |

### 3.3 「対話」中心の学生間交流

シラバスに従い，読書，ノートにメモ，練習レポートと進めていく流れは教員が作っていける。しかし，学生個人に活動をさせてもなかなか全員が書けるようになることは難しい。なかでも，躓く学生ややる気の起らない学生を引き上げることが困難になる。そこで，「文章の読み合い」「対話方式」「ワールド・カフェ方式」という学生間交流を授業に取り込み，協働型授業という手法を用いた。

#### 3.3.1 レポートの読み合い

中等教育までに，学生は自分の書いた作文をクラスの人と読んだり読ませてもらったりという経験をほとんど持ち合わせていない。そこで，レポートの読み合いという交流を授業の合間に行った。

**表 8** で紹介した「ヒト・テクストとの対話ノート」には，メンバーコメント欄 2 名分が設定してあり，そこに書き込みを入れることを約束にした。すなわち，「書いたものは他者に読まれること」を前提にして活動を始めた。はじめは，自分の書いたものを読まれることに抵抗感のあった学生も次第にその方法に慣れ，「学習方法の良さを認める」という感想を出してくれた。他者に対して緩やかに認め合う姿勢を培うことを目標とした結果，少しずつ教室内の雰囲気は変化することになった。

一方，クラスで書き方のわからない人が多い場合や全体に活動が低調になるときには，学生レポート 2，3 例（個人名は記載しない）を印刷し，そのプリントを参考にして，レポートの書き慣れない学生の手助けとした。受講生からは，「他の人の書いたレポートは非常に参考になるので，もっと読みたかった」という意見を受け取った。他者の書いたものは抵抗なく読め、「書

く気」にもつながり，レポートのイメージ形成に寄与できるところがあったようである。

### 3.3.2　1対1の対話レッスン

最近の学生の傾向を踏まえたうえで,「複数のグループ学習」ではなく,「1対1の対話レッスン」からスタートし，各自に「話す責任」と「聴く責任」を自覚化させた。「グループ学習」でよく見られる「誰かが話してくれるだろう」「何となく聞くふりをする」という状況を一切無くすよう，その指導には配慮した。最近の学生の友人関係[14]には「メリット友達」が多く，いつも同じ席で隣同士に座る傾向がある。「メリット友達」との関係は，コミュニケーションする際に阿吽の呼吸で伝わってしまい「相手意識」が働きにくいという状況となる。そこで、こうした馴れ合いを授業活動で都合よく使わないように，指定席の設定や毎時間のなかで 2，3 組のペアの交換というスタイルを用いた。受講生が慣れないうちは毎時間の席移動にもたついていたが，しばらくするとそのスタイルに慣れ，席移動も速くなった。そして，同じクラスにいながらもあまり話したことのないメンバーと幅広く交流する体験を通して，1授業時間で2、3ペアと変えることで対話の基礎を練習させた。

具体的には，対話レッスンは「ミラリング[15]」という段階,「説明」という段階の2段階を設定した。「ミラリング」は，相手の話した 30 秒程度のことを聞き手が鏡に映すように繰り返していく方法である。「説明」は 45 秒程度説明し，聴き手は聴くことに集中する活動である。そこで話される小さなテーマは，例えば「今日持ってきた新聞記事の見出しやリードの内容」「前回の授業で大切だと感じたこと」「これから書くレポートの概要」「今，困っていること」などである。「持ってきた本の表紙を見せながら，概要を 45 秒で話し，聴き手がキーワード 2，3 語を紙に書く」の活動後，多くの学生から「深く読んでいない本であるにもかかわらず，その本の特徴がわかった」とこの活動の意義を認められたこともあった。また,「ミラリング」「説明」型の対話レッスンを繰り返していくなかで，聴くことの難しさや聞き手への配慮の必要性に気づく学生は自然と増えていった。

### 3.3.3　「ワールド・カフェ[16]」への着席

1対 1 の「対話」に慣れてきた学生には,「ワールド・カフェ」の会話を促すように着席方法を変えた。普段話さない受講生，他学科，男女など，同じクラス内でも距離感のあるメンバーと交流できるように自らが動けるように仕掛けた。本学に入学してくる学生の特質のなかに,「教科書を暗記する学習」の頻度が高く,「授業で発表する学習」や「社会での多様な見方の学習」の回答の頻度が低い結果[17]がみられる。こうした特質を乗り越えていく一つのきっかけとして,「協働すること」の土台作りとした。授業第 14 回では,「初年次演習」2クラス合同で「ワールド・カフェ」方式を用いて，普段の受講生以外と話し合う場を自由に作らせ,「1冊と2冊の比較読みの意味」について意見交流を実施させた。

### 3.3.4　ポートフォリオ

紙のポートフォリオ（A3 判を二つ折）を用いて，受講生に出席管理や受講中の課題や様子を「2文日記」のように綴らせていき，毎回学生と教員のコミュニケーションの場としても活用した。15回目には，自分の書き溜めてきたポートフォリオを見ながら振り返るための材料として，記録の意味も気づかせるように導いた。

## 4　受講生の意識変化

### 4.1　レポート記述の変化

こうした実践を経て，学生はどのように変化するのであろうか。いくつかの検証が可能であろうが，本稿では，レポートのなかに書かれている「序論・本論・結論」のうち「結論」の記述文字数に注目してみた。「結論」には,「(1)考察」に，2冊の共通点や相違点，そこから明らかになる考えを書き,「(2)テーマに関する今後の課題」には，レポートの発展的課題を記述させた。第1段階で，1冊読書の「若者・大学生」について書いたレポートの「結論」文字数と，最終段階での2冊以上の読書からの「結論」の文字数を比較した。その結果が，**図2**である。レポート全体の記述文字数の平均が，複数読書時では1冊読書時に比べて 146%になっていた。「結論」だけに注目すると 161%となった。読書冊数に関わらず,「30%程度が結論」というレポート全体のバランスを崩すこともなく，レポート全体の記述量が確実に増えた。質的な調査は今後の課題であるが,「結論」の表現から学生が読み手に丁寧に伝えようとしている印象を受けたことを述べておきたい。

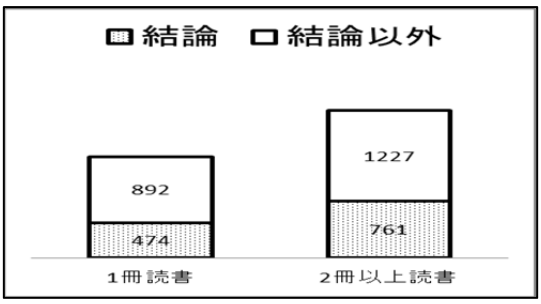


**図2** 読書冊数別のレポート記述文字数平均（N=30）

以下に，結論部分の記述量が大きく変化した事例を1例（**表9**）示しておく。

**表9 同一学生の冊数による結論記述比較**

| |
|---|
| 学生 A　<1冊読書の場合> |
| 題名：「若者について知るために」 |
| 3.　おわりに |
| 今回は，現代の若者の特徴について調べたので，今後は実際の教育現場について書かれている本を読みたいと思う。(52字) |
| 学生 A　<2冊読書の場合> |
| 題名：　「教え育む　―子供の『こころ』を見つめよう―」 |
| 3. おわりに |
| (1) 考察 |
| 今回取り上げた二冊の本と新聞記事から、次の三点が明らかになった。第一は、子供の考え方や行動の変化は、家庭内や社会的な環境の変化が関係しているということである。そして第二は、教師は子供の表面でなく内面を見つめてあげる努力が必要であるということである。なかなか言うことを聞かない生徒を問題児だと決めつけてしまうのではなく、どのようなことなら出来るのか、そして家庭や学校に何か悩みを抱えてはいないか、と生徒に寄り添って考える姿勢が大切である。そして第三は、私たちの気づかない所で教育に携わる活動が数多く行われているということである。NIE活動を通しても、児童が学校で過ごしやすくするための環境作りが全国で行われているということが分かった。 |
| (2) テーマに関する今後の課題 |
| 今回のレポートを通して、学校内や家庭内で悩みを抱えていたり、上手く自己表現ができない子供達に教師としてどう関わっていけばよいかを知ることができた。このことを通して、今後はいじめや不登校について実際の教育現場ではどのような対策が取られているかを調べていきたいと思う。具体的には、本を探して読んだり、実際に教員をしている人に直接聞くなどの行動を取っていきたいと思う。(515字) |

## 4.2　比較読みの実践と学生評価

受講生へ半期で最低7冊の読書という数字を目標とした。その結果,「ヒト・テクストとの対話ノート」の記録によると，97%の学生が7冊以上の図書を手に取り「あらまし読み」を行ったことが明らかになった。それと同時に，学生の意識調査の結果，84%の受講生が比較読みの意義を認めていることが確認できた。「1冊読みと2冊比較読みに関する調査」の結果が**図3**である。

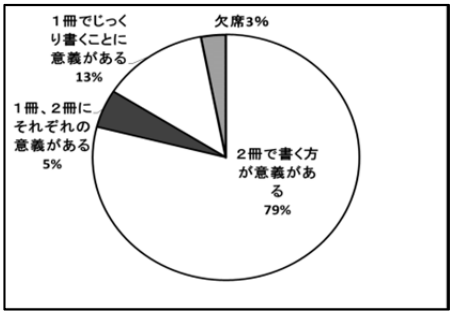


**図3　1冊読みと2冊読みの違い（N=39）**

2冊の比較読みの意義を認める学生が79%,1冊と2冊の場合と両方にそれぞれの意義を認めた学生が 5%となり，合計84%は比較読みの意義を指摘していた。

さらに，学生の受け止め方を確かめるために，2クラス合同授業の第14回で「比較読みという方法をどのように捉えるか」というテーマを取り上げ，ワールド・カフェ方式で交流させた結果が**表11**である。

**表11** から，受講生の実態が明らかになった。第一に，2冊の選書，読書，文章化することは習慣の少ない学生にとって味わったことのない経験である。第二に，苦労しながらも2冊比較読みの方法は「多面的にものごとが捉えられる方法」であることに学生は気づいている。第三に，テーマが自分の関心事でないと比較読みを楽しいとは感じられない傾向がある。この状況を踏まえ,学生への課題の出し方に工夫をすること，テーマに自由度を与え，緩やかに展開することの重要さを確認した。

**表11 受講生の「比較読み」への理解**

| 2冊読みの場合 | 観点 | 1冊読みの場合 |
|---|---|---|
| ・思考が深まる！・目線・違った筆者・1冊じゃ分からなかったことが2冊目で分かる。・2冊だと浅い読みになると見せかけて、実はポイントを整理すると深い読みができる。・比べることで深まる　・深い理解につながる・著者の頭の中のイメージ×2=分かりやすい | 深まり | ・1冊をしっかり読んで自分がどう思うのかを考えた方がよい！・2冊だとどちらも中途半端になるかも。諦めるときは諦める。・1冊だけでは思考を深めるのは難しい。 |
| ・いろいろな視点からテーマをみれる・多様な考え方ができる・多面的・視野が広まる・角度　・まず目次！・比較すると一つが二つに・たくさん読んだ方がたくさん考える・内容を整理する（キーワードとか）・相違点をたくさんみつける！！・1冊だと1つの視点、2冊だと2つの視点から考えられる。 | 拡がり | ・同じ方向のみ |

| | | |
|---|---|---|
| ・一つの考えより他の考えを取り入れられる。自分の意見とてらしあわせて考察・考えが偏らないため・「かたい表現の本」⇒「共感してしまいがち」⇒「2 冊選んで幅広い視点を！」・相違点を探すことで自分の考えを作り出すことができる・２冊なら作者の主張をうのみにしなくなる・2 冊以上の方が新しい考えが生まれやすい | 自分の考えへの影響 | ・もっと詳しくしたい理想よりも自分の考えを・１冊だと筆者の考えに影響されやすい・1 冊だけだと筆者１人の視点に固執してしまう・目力・１冊だと考えが限定される・1 冊をしっかり読んで自分がどう思うのかを考えた方がよい！・１冊だとひとりよがり |
| ・量が多くかける・冊数を多く読むことでより多く（文章の）分量が書ける | 時間 | ・日数的に２冊だとさわりしか読めないから・1 冊だと量が書けない・コストパフォーマンス |
| ・冊数はより多い方が良い・２冊以上は面白いYo!!・興味がないと２冊はつらい・２冊読みは選び方が大・身近なこと・２冊読むのはむずかしい | 冊数 | ・１冊の大切さをみんなに知ってほしい・意見をおしつけるのはよくない・「１冊！」 |
| ・背表紙から類似したものを選ぶ！・テーマだけでなく年齢や職業も気にして選べる | 選書 | ・１冊だと選ぶのに力が必要 |

### 4.3　受講生の学んだこと（記述調査結果）

授業最終回で「この授業を通して学んだことを３点以上箇条書きにしてください。」という質問をした。その結果，記述された要素を**図 4** に類型化した。

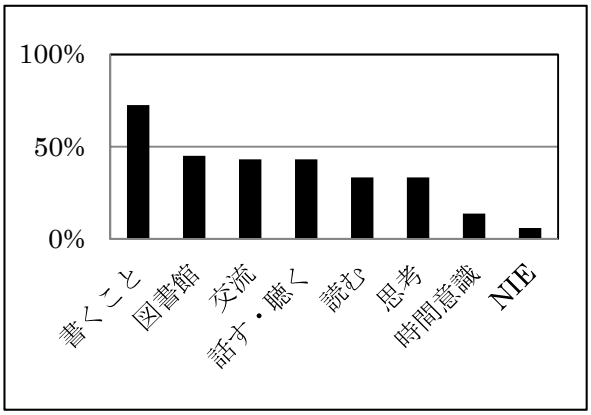


**図 4** 授業から学んだこと（N=51）

次に,「この授業で学んだことをどのように具体的な行動に移したか」を１人３例以上挙げてもらった。その結果の一部を**表 12** に分類・例示した。

**表 12** 具体的行動の報告　（N=51）

| |
|---|
| [**書く** 37 例]他の講義/授業の課題/ 「国文学史概説」/「教育原論」/「スポーツⅠ」のレポートにも使えた/苦労しないで書けた/他の教科・科目のレポートで良い評価がもらえたし，自分でもすらすらと書けるようになり上達したと思った/他の授業でレポートの課題が出た時に，書き出しに困らなくなった/どういう手順を踏めばいいのかわかるようになった/基本的にどの授業のレポートも定型的にできるようになった。それは初年次演習で書き方を学んだためである/レポートの書き方も人に読みやすくしようと努力するようにしている/中・高では習わないので，レポートの書き方を授業内でもっと扱っても良いのではないかと感じた。個人的には，6，7 回は使っても良いと思う |
| [**図書館（読書・自習）** 23 例] 高校時代は全く本を読まなかったが，多くの本を読むようになった/図書館をよく利用し，本を探した/自分で見つけた課題を図書館等を使い，自習するようになった/「日本国憲法」でのレポートに使う本をスムーズに見つけ選ぶことができました/図書館などへ行ったとき，本のタイトルだけでなく，出版年や作者の生い立ちなどまで目を通すようになった/静かな場所で勉強したいときに，毎週のようにこの授業で図書館に通っているうちに気軽な場所となり，行くようになった/「国文学史概論」の授業でレポートを提出する時，私は空いている時間に書庫へ行き論文を借りてレポートを書く際の材料として活かせることができた。引用する時も参考文献を明記した/書庫以外にも，自分の調べたい本を，パソコンを利用してすばやく探せるようになった |
| [**交流** 22 例] 対話レッスンのとき，初めての喋る人でも仲の良い人と同じように話すことができた/最近，他の学科の友達とも関わるのだが，特別支援の友達と手話をしながら，手話を学習しながら関わることがとても楽しい/委員会，サークル，バイトでも話しかけるようにしている。/初めて行った場所でも友達を作れるようになった/アルバイト先で今まであまり話せなかった人と，自分の意見を言い合えるようになった/他専攻の子ともたくさんしゃべれて多様な考えを聞くことができた |
| [**話す・聴く** 24 例] 多少，要点をまとめて相手に伝えるようになった/発表するときに相手に伝えたいことを短い文章でまとめて伝えることができた。/相手の話を聞くときは目を見て，適度なあいづちを入れる/バイト先で目上の人からの指示をされている時，その人が言ったことに単にリヴォイスしたら，その人も相づちをうってくださって，会話にあたたかさが生まれた/友人との会話で結論から言うことを心がけた |
| [**読む** 18 例] 情報のまとめ方も初年次演習で何回もレポートを書いたのでまとめられるようになった/「国文学史」でレポートを制作する際に初年次演習で学んだあらまし読みで参考文献にあらかた目星をつけ，レポートの書き方を応用した/本に対する抵抗がなくなった/2 冊の本を比較することによって考えの深まりを感じた/参考資料を選ぶ際も何をどこで選べば，どうやって選べばいいのかわかるようになった/「国文学史概説」で資料の本を手早く読めた/レポートを書くために普段あまり読まないジャンルの本を読むようになった |

| |
|---|
| [思考 17 例] 他人のレポートを読んで自分と違った考えを取り入れ，レポートを工夫することができた/この授業以外の授業のレポートでも比較して考えながら書くことができた/塾のバイトで接する子どもの考え方に気を配るようになった。/新聞とかニュースも１つのものだけ見るのではなく，他のものを見るようにすることで考え方が深くなった/バイト先での仕事のやり方に困ったときに，色々な人の意見を取り入れるようになった |
| [時間意識 7 例] 時間を区切って，色々な教科の勉強をバランスよくできた/レポートを書く時に時間を節約できた/提出期限までに何が終わっていないのかをはっきりさせて取り組むことができた/自習が習慣になった/他の授業でレポートなどの課題が出されたときに，計画的に取り組んでいたのであせることがなかった/いつもならダラダラ過ごしてしまうが，学習時間を設定することで，ムダな時間を少なくすることができるようになった/毎週火曜日の夕方を授業の復習やレポートの為の資料探しに当てるようになった |
| [NIE3 例] 新聞を読むようになった/今までより新聞を読むようになったので，憲法の授業で最近のニュースの話題が出てきたら，わかるようになった |
| [忍耐力 2 例]少し辛い量の課題に耐えられる/多忙な日々を乗り越えたことによる自信をつけた |
| [他への活用 2 例]活用しようと思ったことはなかった/活用できなかった |

## 5 まとめ

2014 年度前期国語・書道専攻「初年次演習」では，大学生での新しい読書方法「実読」「あらまし読み」「比較読み」を体験し，クラスメンバーとの交流を支えとしてレポートを作成する授業を実践した。選書，読書，ノートへのメモ，手書きでの練習レポートなど，学生への負担の多い授業であったと想像している。それにもかかわらず，大半の学生は熱心に取り組み，学生の事後調査からも，獲得できた学習方法は他の科目や大学内外の他の場面にも応用される傾向にあった。

一方，課題としては，クラス内数名程度，授業の目標が理解できなかった学生がいたことである。そこで，課題の総量を検討し，読むことや書くことの苦手な学生へ「支援の足場」を再設定することを考えている。2 冊という負担を配慮し，「1 冊の良さが発見できるのは 2 冊を手に取った時からであり，どうしても 2 冊が組み合わせられない時には，1 冊を中心にレポートすればよい」と授業内で支援してきたが，じゅうぶんに伝わらない学生もいた。本実践の「あらまし読み」は，知の底辺を広げることを試みるものであり，あくまでも「予備読書」であることをさらに説明していく必要性も感じている。

本研究では，今後，学生の伸長を統計学的に客観的な把握を行うことや，書かれた文章の質的伸長をどのように捉えていくのかを考えていきたい。そして，教員養成課程の学生の初年次教育の根底として「読書」と「交流」を基盤とした方法論を確立することを課題としていきたい。

## 注

1 牧恵子（2009）「教員養成課程初年度における『プレゼンテーション』を用いた授業の報告」『教養と教育』9. 愛知教育大学

2 瀬田祐輔・牧恵子共著（2010）「プロジェクト法を用いた『読書と豊かな人間性』の実践」『愛知教育大学教育実践総合センター』13. 愛知教育大学

3 大竹志保美（愛知教育大学非常勤講師）

4 牧恵子（2014）『学生のための学び入門―ヒト・テクストとの対話を通して―』ナカニシヤ出版

5 牧恵子（2014）「ヒト・テクストとの対話ノート」本実践用の読書ワークノート

6 牧恵子（2014）「対話しながら NIE」本実践用の NIE ワークノート

7 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室「大学における教育内容等の改革状況について（平成 20 年度）初年次教育の取組状況」(2010) http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/__icsFiles/afieldfile/2010/05/26/1294057_1_1.pdf　2015.05.01 最終検索

8 初年次教育学会編（2013）『初年次教育の現状と未来』世界思想社　pp.20-23

9 河合塾編（2010）『初年次教育でなぜ学生が成長するのか』東信堂　pp.6-7

10 樋口裕一（2007）『差がつく読書』角川書店で使用されている用語。「実読」は「何か行動に結びつけるために、情報や知識を得ようとして行う読書」と説明されている。それに対して，「楽読」は，「ただ楽しみのためだけに読む読書」と定義されている。

11 英語教育での skimming の手法に近い読書方法であり，筆者が 2013 年度から学習方法の一つとして提案している仮称である。初年次用日本語テキストでは用語「スキミング」を使用している本が多いが，その内容・方法を具体的に明らかにしているものは未見である。

12 初等教育での川上弘宜（2009）『「比べ読み・重ね読み」で「一人読み」』，船津啓治（2010）『比べ読みの可能性とその方法』を参考に，苅谷剛彦（2002）『知的複眼思考法』を踏まえ，中等・高等教育での「比較読み」を模索している。

13 塚田泰彦（2014）『読む技術―成熟した読書人を目

指して―』創元社
14 「大学生の友人関係に関する意識調査」（2012）公益社団法人東京広告協会
http://www.tokyo-ad.or.jp/activity/seminar/pdf/FUTURE2012.pdf　2015.05.01 最終検索
最近の大学生は目的別友達を持つ傾向がある。「授業の時だけ一緒の授業友達」63.0%，「テスト　友達」39.8%，「趣味友達」33.5%，「食事友達」26.5%，「ネット友達」22.9%である。こうした「メリット友達」の関係を作っている。
15 心理学で相手との信頼関係を築くために「ミラリング」という物まねの手法がある。教室内であまり話したことのない人と親和関係を結ぶために「話した言葉」を真似する程度の緩やかなミラリングを取り入れた。受講生は，ここから「傾聴」の難しさに気づくことが多い。
16 アニータ・ブラウン，デイビッド・アイザックス，ワールド・カフェ・コミュニティ（香取一昭・川口大輔訳）（2007）『ワールド・カフェ』ヒューマンバリュー
17 愛知教育大学教員養成開発連携センターIR 部門（2015）「教学 IR に関する FD・SD 研修―なぜ大学において IR が重要なのか―」報告書